台川

宮沢賢治

青空文庫

〔もうでかけましょう。〕たしかに光がうごいてみんな立ちあがる。腰をおろしたみじかい草。かげろうか何かゆれている。かげろうじゃない。網膜が感じただけのその光だ。

〔さあでかけましょう。行きたい人だけ。〕まだ来ないものは仕方ない。さっきからもう二十分も待ったんだ。もっともこのみちばたの青いいろの寄宿舎はゆっくりして爽かでよかったが。これからまたここへ一遍帰って十一時には向うの宿へつかなければいけないんだ。「何処さ行ぐのす。」そうだ、釜淵まで行くというのを知らないものもあるんだな。〔釜淵まで、一寸三十分ばかり。〕

おとなしい新らしい白、緑の中だから、そして外光の中だから大へんいいんだ。天竺木綿、その菓子の包みは置いて行ってもいい。雑嚢や何かもここの芝へおろしておいていい行かないものもあるだろうから。

「私はここで待ってますから。」校長だ。校長は肥ってまっ黒にいで立ちたしかにゆっくりみちばたの草、林の前に足を開いて投げ出している。

〔はあ、では一寸行って参ります。〕木の青、木の青、空の雲は今日も甘酸っぱく、足なみのゆれと光の波。足なみのゆれと光の波。

粘土のみちだ。乾いている。黄色だ。みち。粘土。

小松と林。林の明暗いろいろの緑。それに生徒はみんな新鮮だ。

そしてそうだ、向うの崖の黒いのはあれだ、明らかにあの黒曜石のdyke だ。ここからこんなにはっきり見えるとは思わなかったぞ。

よしうまい。

〔向うの崖をごらんなさい。黒くて少し浮き出した柱のような岩があるでしょう。あれは水成岩の割れ目に押し込んで来た火山岩です。黒曜石です。〕ダイクと云おうかな。いいや岩脈がいい。〔ああいうのを岩脈といいます。〕わかったかな。

〔わかりましたか。向うの崖に黒い岩が縦に突き出ているでしょう。あれは水成岩のなかにふき出した火成岩ですよ。岩脈ですよ。あれは。〕

ゆれてるゆれてる。光の網。

〔この山は 流紋凝灰岩 でできています。石英粗面岩の凝灰岩、大へん地味が悪いのです。赤松とちいさな雑木しか生えていないでしょう。ところがそのへん、麓の緩い傾斜のところには青い立派な闊葉樹が一杯生えているでしょう。あすこは古い 沖積扇 です。運ばれてきたのです。割合肥沃な土壌を作っています。木の生え工合がちがって見えましょう。わかりましょう。〕わかるだろうさ。けれどもみんな黙って歩いている。これがいつでもこうなんだ。さびしいんだ。けれども何でもないんだ。

後ろで誰かこごんで石ころを拾っているものもある。小松ばやしだ。混んでいる。このみちはずうっと上流まで通っているんだ。造林のときは苗や何かを一杯つけた馬がぞろぞろここを

行くんだぞ。

〔志戸平のちかく豊沢川の南の方に杉のよくついた奇麗な山があるでしょう。あすこここと はとても木の生え工合や較べにも何にもならないでしょう。向うは安山岩の集塊岩、こっち は流紋凝灰岩です。石灰や加里や植物養料がずうっと少いのです。ここにはとても杉なんか 育たないのです。〕うしろでふんふんうなずいているのは藤原清作だ。あいつは太田だからよ くわかっているのだ。

〔尤も向うの杉のついているところは北側でこっちは南と東です。その関係もありますがそう でなくてもこっちは北側でも杉やひのきは生えません。あすこの崖で見てもわかります。この 山と地質は同じです。ただ北側なため雑木が少しはよく育ってます。〕いいや駄目だ。おしま いのことを云ったのは結局混雑させただけだ。云わないでおけばよかった。それでもあの崖 はほんとうの嫩い緑や、灰いろの芽や、樺の木の青やずいぶん立派だ。佐藤篤がとなりに並ん で歩いてるな。桜羽場がまた凝灰岩を拾ったな。頬がまっ赤で髪も赭いその小さな子供。 雲がきれて陽が照るしもう雨は大丈夫だ。さっきも一遍云ったのだがもう一度あの禿の所の平 べったい松を説明しようかな。平ったくて黒い。影も落ちている。どこかであんなコロタイプ を見た。及川やなんか知ってるんだ。よすかな。いいや。やろう。

〔さあ、いいですか。あすこに大きな黄色の禿げがあるでしょう。あすこの割合上のあたりに 松が一本生えてましょう。平ったくてまるで潰れた蕈のようです。どうしてあんなになったん

ですか。土壌が浅くて少し根をのばすとすぐ岩石でしょう。下へ延びようとしても出来ないでしょう。横に広がるだけでしょう。ところが根と枝は相関現象で似たような形になるんです。枝も根のように横にひろがります。桜の木なんか植えるとき根を束ねるようにしてまっすぐに下げて植えると土から上の方も箒のように立ちましょう。広げれば広がります。」

「そんだ。林学でおら習った。」何と云ったかな。このせいの高い眼の大きな生徒。坂になったな。ごろごろ石が落ちている。

「先生この石何て云うのす。」どうせきまってる。

〔凝灰岩。流紋凝灰岩だ。凝灰岩の温泉の為に硅化を受けたのだ。〕

光が網になってゆらゆらする。みんなの足並。小松の密林。

「釜淵だら俺ぁ前になんぼがえりも見だ。それでも今日も来た。」

うしろで云っている。あの顔の赤い、そしていつでも少し眼が血走ってどうかすると泣いているように見える、あの生徒だ。五内川でもないし、何と云ったかな。

けれどもその語はよく分っているぞ。よくわかっているとも。

巨礫がごろごろしている。一つ欠いて見せるかな。うまくいった。パチンといった。〔これは安山岩です。上流の方から流れてきたのです。〕

すっと歩き出せ。関さんだ。「この石は安山岩であります。上流から流れてきたのです。」まねをしている。堀田だな。堀田は赤い毛糸のジャケツを着ているんだ。物を言う口付きが覚束

なくて眼はどこを見ているかはっきりしないで黒くてうるんでいる。今はそれがうしろの横でちらっと光る。

そこの松林の中から黒い畑が一枚出てきます。

（ああ畑も入ります入ります。遊園地には畑もちゃんと入ります）なんて誰だったかな、云っていた、あてにならない。こんな畑を云うんだろう。おれのはもっとずっと上流の北上川から遠くの東の山地まで見はらせるようにあの小桜山の下の新らしく墾いた広い畑を云ったんだ。

「全体どこさ行ぐのだべ。」

「なあに先生さ従いでさい行げばいいんだじゃ。」また堀田だな。前の通りだ。うしろで黄いろに光っている。みんな躊躇してみちをあけた。おれが一番さきになる。こっちもみちはよく知らないがなあにすぐそこなんだ。路から見えたら下りるだけだ。防火線もずうっとうしろになった。

〔あれが小桜山だろう。〕けわしい二つの稜を持ち、暗くて雲かげにいる。少し名前に合わない。けれどもどこかしんとして春の底の樺の木の気分はあるけれどもそれは偶然性だ。よくわからない。みちが二つに岐れている。この下のみちがきっと釜淵に行くんだ。もうきっと間違いない。

小松だ。密だ。混んでいる。それから巨礫がごろごろしている。うすぐろくて安山岩だ。地質調査をするときはこんなどこから来たかわからないあいまいな岩石に鉄槌を加えてはいけない

と教えようかな。すぐ眼の前を及川が手拭を首に巻いて黄色の服で急いでいるし、云おうかな。けれどもこれは必要がない。却って混雑するだけだ。とにかくひどく坂になった。こんな工合で丁度よく釜淵に下りるんだ。遠くで鳥も鳴いているし。下の方で渓がひどく鳴っている。ことによるとここらの下が釜淵だ。一寸のぞいてみよう。

黒い松の幹とかれくさ。みんなぞろぞろ従いてくる。渓が見える。水が見える。波や白い泡も見える。ああまだ下だ。ずうっと下だ。釜淵は。ふちの上の滝へ平らになって水がするする急いで行く。それさえずうっと下なのだ。

この崖は急でとても下りられない。下に降りよう。松林だ。みちらしく踏まれたところもある。下りて行こう。藪だ。日陰だ。山吹の青いえだや何かもじゃもじゃしている。さきに行くのは大内だ。大内は夏服の上に黄色な実習服を着て結びを腰にさげてずんずん藪をこいで行く。よくこいで行く。

急にけわしい段がある。木につかまれ木は光る。雑木は二本雑木が光る。

「じゃ木さば保ご附くこなしだじゃい。」誰かがうしろで叫んでいる。どういう意味かな。木にとりつくと弾ね返ってうしろのものを叩くというのだろうか。

光って木がはねかえる。おれはそんなことをしたかな。いやそれはもうよく気をつけたんだ。

藪だ。もじゃもじゃしている。大内はよくあるく。

崖だ。滝はすぐそこだし、ここを下りるより仕方ない。さあ降りよう。大内はよく降りて行く。

急だぞ。この木は少し太すぎる。灰いろだ。急だぞ、草、この木は細いぞ、青いぞあぶないぞ。なかなか急だ。大丈夫だ。この木は切ってあるぞ。〔ほう、〕そこはあんまり急だ。おりるのか。仕方ない。木がめまぐるしいぞ。「一人落ぢればみんな落ぢるぞ。」誰かうしろで叫んでいる。落ちてきたら全くみんな落ちる。大内がずうっと落ちた。河原まで行ってやっととまった。おれはとにかく首尾よく降りた。

少し下へさがり過ぎた。瀑まで行くみちはない。凝灰岩が青じろく崖と波との間に四、五寸続いてはいるけれどもとてもあすこは伝って行けない。それよりはやっぱり水を渉って向うへ行くんだ。向うの河原は可成広いし滝までずうっと続いている。

けれども脚はやっぱりぬれる。折角ぬらさないためにまわり道して上から来たのだ、飛石を一つこさえてやるかな。二つはそのまま使えるしもう四つだけころがせばいい、まずおれは靴をぬごう。ゴム靴によごれた青の靴下か。〔一寸待って、今渡るようにしますから。〕

この石は動かせるかな。流紋岩だかなりの比重だ。動くだろう。水の中だし、アルキメデス、水の中だし、動く動く。うまくいった。波、これも大丈夫だ。大丈夫。引率の教師が飛石をつくるのもおかしいがまたえらい。やっぱりおかしい。ありがたい。うまくいった。

ひとりが渡る。ぐらぐらする。あぶなく渡る、二人がわたる。
もう一つはどれにするかな　もう四人だけ渡っている。飛石の上に両あしを揃えてきちんと立って四人つづいて待っているのは面白い。向うの河原のを動かそう。影のある石だ。持てるかな。持てる。けれども一番波の強いところだ。恐らく少し小さいぞ。小さい。波が昆布だ、越して行く。もう一つ持って来よう。こいつは苔でぬるぬるしている。これで二つだ。まだぐらぐらだ。も一つ要る。小さいけれども台にはなる。大丈夫だ。おれははだしで行こうかな。いいやっぱり靴ははこう。面倒くさい靴下はポケットへ押し込め、ポケットがふくれて気持ちがいいぞ。
素あしにゴム靴でぴちゃぴちゃ水をわたる。これはよっぽどいいことになっている。前にも一ぺんどこかでこんなことがあった。去年の秋だ。腐植質の野原のたまり水だったかもしれない。向うに黒いみちがある。崖の茂みにはいって行く。これが羽山を越えて台に出るのかもわからない。帰りに登るとしようかな。いいや。だめだ。曖昧だしそれにみんなも越えれまい。
「先生、この石何す。」一かけひろって持っている。〔ふん。何だと思います。〕「何だべな。」〔凝灰岩です。ここらはみんなそうですよ。浮岩質の凝灰岩。〕
みんなさっきはあしをぬらすまいとしたんだが日が照るし水はきれいだし自分でも気がつかず川にはいったんだ。
もうずんずん瀑をのぼって行く。cascade だ。こんな広い平らな明るい瀑はありがたい。上へ

行ったらもっと平らで明るいだろう。けれども壺穴の標本を見せるつもりだったが思ったくらいはっきりはしていないな。多少失望だ。岩は何という円くなめらかに削られたもんだろう。水苔も生えている。滑るだろうか。滑らない。ゴム靴の底のざりざりの摩擦がはっきり知れる。滑らない。大丈夫だ。さらさら水が落ちている。靴はビチャビチャ云っている。みんないい。それにみんなは後からついて来る。

苔がきれいにはえている。実に円く柔らかに水がこの瀑のところを削ったもんだ。この浸蝕の柔らかさ。

もう平らだ。そうだ。いつかもここを溯って行った。いいや、此処じゃない。けれどもずいぶんよく似ているぞ。川の広さも両岸の崖、ところどころの洲の青草。もう平らだ。みんな大分溯ったな。

「ここをごらんなさい。岩石の裂け目に沿って赤く色が変っているでしょう。裂け目のないところにも赤い条の通っているところがあるでしょう。この裂け目を温泉が通ったのです。温泉の作用で岩が赤くなったのです。ここがずうっとつちの底だったときですよ。わかりますか。」だまっている。波がうごき波が足をたたく。日光が降る。この水を渉ることの快さ。菅木がいるな。いつものようにじっとひとの目を見つめている。

「ここをごらんなさい。岩に裂け目があるでしょう。ここを温泉が通って岩を変質させたので

す。風化のためにもこう云う赤い縞はできます。けれどもここではほかのことから温泉の作用ということがわかるのです。」

ずいぶん上流まで行った。実際こんなに川床が平らで水もきれいだし山の中の第一流の道路だ。どこまでものぼりたいのはあたりまえだ。

向うの岸の方にうつろう。

「先生この岩何す。」千葉だな。お父さんによく似ている。〔何に似てます。何でできてますか。〕だまっている。〔わかりませんか。礫岩です。礫岩です。凝灰質礫岩。〕及川だな。〔いいですか。これは温泉の作用ですよ。この裂け目を通った温泉のために凝灰岩が変質を受けたんです。〕

みんなわかるんだな。これは。向うにも一つ滝があるらしい。うすぐろい岩の。みんなそこまで行こうと云うのか。草原があって春木も積んである。ずいぶん溯ったぞ。ここは小さな段だ。

「ああ云う岩のすき間のごと何て云うのだたべな。習ったたんとも。」

〔やっぱり裂け目です。裂け目でいいんです。〕習ったというのは節理だな。節理なら多面節理、これを節理と云うわけにはいかない。裂罅だ。やっぱり裂け目でいいんだ。壺穴のいいのがなくて困るな。少し細長いけれどもこれで説明しようか。**elongatedpot-hole**〔ここがどうしてこう掘れるかわかりますか。石ころ、礫がこれを掘るのです。そら水のために礫がごろごろするでしょう。だんだん岩を掘るでしょう。深いところが一層深くなるはずです。もっと大き

なのもあります。」

日光の波、日光の波、光の網と、水の網。

「ほこの穴こまん円けじゃ。先生。」

ああいい、これはいい標本だ。こいつなら持ってこいだ。

〔さあ、見て下さい。これはいい標本です。そら。この中に石ころが入ってましょう。みんな円くなってるでしょう。水ががりがり擦ったんです。そら。〕

実にいい礫だ。まっ白だ。まん円だ水でぬれている。取ってしまった。誰かがまた掻き廻す。もうない。あとは茶色だし少し角もある。ああいいな。こんなありがたい。あんまり溯る。もう帰ろう。校長もあの路の岐れ目で待っている。

〔ほう。戻れ。ほう。〕向うの崖は明るいし声はよく出ない。聞えないようだ。市野川やぐんぐんのぼって行く。〔ほう、〕「戻れど。お。」「戻れ。」

向いた向いた。一人向けばもういい。川を戻るよりはここからさっきの道へのぼったほうがいい、傾斜もゆるく丁度のぼれそうだ。〔みんなそこからあの道へ出ろ。〕

手を振ったほうがわかるな。わかったわかったわかったようだ。市野川が崖の上のみちを見ている。

うしろの滝の上で誰か叫んでいる。大竹だ。「おら荷物置いてきたがらこっちがら行ぐ。」よかろう。〔よおし。〕もう大竹が滝をおりて行く。すばやいやつだ。二、三人またついて行く。

それからも一人おくれてひどく心配そうに背中をかがめて下りていく。斉藤貞一かな。一寸こっちを見たところには栗鼠の軽さもある。ほんとうに心配なんだ。かあいそう。

市野川やみんながぞろぞろ崖をみちの方へ上って行くらしい。

そうすればおれはやっぱり川を下ったほうがいいんだ。もしも誰か途中で止っていてはわるい。尤も靴下もポケットに入っているし必ず下らなければならないということはない、けれどもやっぱりこっちを行こう。ああいい気持だ。鉄槌をこんなに大きく振って川をあるくことはもう何年ぶりだろう。波が足をあらい水はつめたく陽は射している。

「先生ぁ、ずいぶん足ぁ早いな。」富手かな、菅木かな、あんなことを云っている。足が早いというのは道をあるくときの話だ。ここも平らで上等の歩道なのだ。ただ水があるばかり。

「先生、あの崖のどご色変ってるのぁ何してす。」簡だ。崖の色か。

〔あれは向うだけは土が落ちたんです。滑って。〕

うん。あるある。これが裂罅を温泉の通った証拠だ。玻璃蛋白石の脈だ。

〔ここをごらんなさい。岩のさけ目に白いものがつまっているでしょう。これは温泉から沈澱したのです。石英です。岩のさけ目を白いものが埋めているでしょう。いい標本です。〕みんなが囲む。水の中だ。

「取らえないがべが。」「いいや、此処このまんまの標本だ。」

「それでも取らえないがべが。」〔取ってみますか。取れます。〕

中々面倒だ。

「先生こっちにもっと大きなのあるんす。」あるある。これならネストと云ってもいい。これなら取れる。ハムマアの尖った方ではだめだ。平たい方は……。

水がぴちゃぴちゃはねる。そっちの方のものが逃げる、ふん。

〔水がはねますか。やっぱりこっちでやるかな。〕

白く岩に傷がついた。二所ついた。

とれる。とれた。うまい。新鮮だ。青白い。

緑簾石もついている。そうじゃないこれは苔だ。〔いいですか。これは玻璃蛋白石です。温泉から沈澱したのです。晶洞もあります。小さな石英の結晶です。持っておいでなさい。〕

誰だ崖の上で叫んでいるのは。

「先生。おら河童捕りしたもや。河童捕り。」藤原健太郎だ。黒の制服を着て雑嚢をさげ、ひどくはしゃいで笑っている。どうしていまごろあんな崖の上などに顔を出したのだ。

「先生。下りで行ぐべがな。先生。よし、下りで行ぐぞ。」

〔うん。大丈夫。大丈夫だ。〕おりるおりる。がりがりやって来るんだな。ただそのおしまいの一足だけがあぶないぞ。裸の青い岩だし急だ。

〔おおい。もう少し斜におりろ。〕おりるおりる。どんどん下りる。もう水へ入った。〔どうしたのです。〕「先生。河童捕りあんすた。ガバンも何も、すっかりぬらすたも。」〔どこで。

……」

もう下ろう。滝に来た。下りているものもある。水の流れる所は苔は青く流れない所は褐色だ。みんなこわごわ下りて来る。水の流れる所は大丈夫滑らないんだ。〔水の流れるところをあるきなさい。水の流れるところがいいんです。〕

あれは葛丸川だ。足をさらわれて淵に入ったのは。いいや葛丸川じゃない。空想のときの暗い谷だ。どっちでもいい。水がさあさあ云っている。「いいな。あそごの水の跳ね返る処よ。」

うん、いい早池峯山の七折の滝だってこんなのの大きなだけだろう。

もうみんなおりる。おれもおりる。たった一人あとからやって来る人がある。こわそうだ。

〔水の流れるところをあるくんです。水の流れる所を歩くんですよ。〕

そうだ。そうだ。いい気持ちだ。

青空文庫情報

底本：「イーハトーボ農学校の春」角川文庫、角川書店
　　1996（平成8）年3月25日初版発行
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
　　1995（平成7）年5月
入力：ゆうき
校正：noriko saito
2010年9月5日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

台川

宮沢賢治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/